

# 手に職つけて再犯防止

少年院や刑務所の出所者を積極的に採用して再犯防止を目指す取り組み「職親プロジェクト」が、関西の企業を中心に全国に広がってきた。お好み焼きチェーンの「千房」(大阪市)のほか、幅広い業種が雇用の受け皿となっている。

## 更生へ、企業にできることは…

レポート  
かんざい  
経済

「更生は一人ではできない。周囲の支えが必要だ」と語るのは、約8年前から独自に出所者を受け入れてきた千房の中井政嗣社長(69)。当初は社員から「客が怖がって店に来なくなる」と不安の声もあったが、採用した男性が約4年間勤務し、店を支える人物になる成功例も出た。

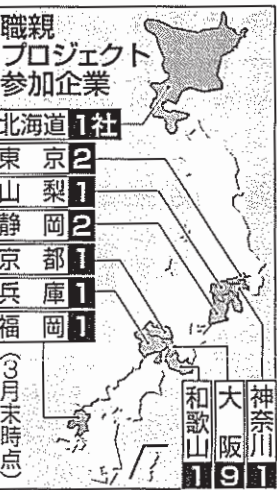
## 元受刑者の積極雇用広がる



大阪市内の美容室で、少年院から出所した男性(手前)にレジ打ちの指導をする黒川洋司さん

取り組みを支援する日本財団によると、2013年2月に千房が中心となり、関西の企業7社で発足。現在は北海道や関東、兵庫、福岡も含め計20社が参加している。

企業側が施設に出向いたかもしれない」と明かす。草刈健太郎社長(44)は妹を殺害された過去を持つが、「被害者遺族として葛藤も長月(6)の就労体験後、正あるが、同じ思いをす規採用となる。財団はる人を出さないために



も犯罪の防止に取り組みたい」と語る。大阪市内で美容室を展開するプログラシブの黒川洋司社長(43)は自身が傷害事件を起こしたことがある。「経験から気持ちがよく分かる」と再出発の場をいった課題への対応も進める。

少年院から出所した男性(19)は「以前はやりたいたいことが何もなかったが、今は仕事が楽しい。資格を取って自分の店を持ちたい」と話す。美容師の資格を取るため通信制学校にも通っている。

一方、千房では14年に採用した20代男性が半年後に行方不明に。パチスロで約30万円の借金があったことが発覚。社長が借金を肩代わりして職場に戻したが、再び姿を消した。中井社長は「くじけそうにもなるが続けていきたい」と話す。

これまでの就労体験者24人のうち、今も仕事を続けるのは半数だ。取り組みでは継続した就労を目指し、出所者が働く前に一定の技能を学ぶことや、ギャンブル依存の克服といった課題への対応も進める。

出所者の受け入れは既存社員の養成にも役立つというようだ。精肉・外食店経営の千里屋(伊丹市)は約1年半前から同プロジェクトに参加。20代半ばの男性1人を受け入れた。体調を崩して半年ほどで退職したが、同社は「その人の過去でなく、未来を問う姿勢を大事にしている。懸命に働いてくれるなら、分け隔てなく採用したい」と強調。「受け入れ店の店長や従業員には、人を育てる経験ができるいい機会になる」としている。